

Safe Volu

(Former First Aid)

静岡県赤十字安全奉仕団機関紙 No.70 平成20年2月20日発行

「家庭看護法介助員フォローアップ講習」終了！

1月29日（沼津血液センター）、30日（支部）、31日（献血ルーム「みゆうず」）の3日間、県内3会場で家庭看護法介助員フォローアップ講習（支部主催、本団共催）が開催されました。昨年度までは支部1会場でしたが、受講者から要望が多かった「居住地の近くでの開催を実現して！」の声を重要視し、今年度は、東・中・西部各1会場で開催いたしました。本団からタスク参加をした団員の報告は、3月号掲載いたします。（赤十字事業部会）

「防災とボランティアのつどい」（東京）からの報告

東京都内で開催された「防災とボランティアのつどい」に、1月19日（土）本団から1人の団員が参加しましたので、当日の様子を報告していただきます。

「今回は、昨年までとは開催方法が大きく変わり、誰でも参加できる会場形式で行われました。今回初めての試みである「仮想社会と現実世界」での対話。私のいた地下道の会場と全世界に広がるネットワーク上のバーチャルカフェとがひとつに繋がり、防災ボランティアの活動、被災地での出来事、被災者の気持ちなどについて語り合いました。途中で防災担当大臣が来場され、私達の声に耳を傾け答えてくれるという素晴らしいハプニングもありました。この「仮想社会」という所では、国籍、性別、年齢、職業などの差別はなく「全ての人が対等に」会話する事ができます。まさしく赤十字を感じさせるもので、安全奉仕団の目的に通じるものがありました。

展示品の中には、かわいいクマのぬいぐるみ型の非常持出袋など、工夫の凝らされた防災用品がたくさん展示されていました。その他にも、「よりよく生きる・生き抜く」事を目標に、数多くの方々の活動が紹介され、とてもホットな気持ちになりました。

ワークショップでは、実際に、災害ボランティアの現場で起こった問題をクイズ形式で出題し、その立場や状況から自分ならどうするか、その判断にどんな問題があるかを議論しました。ボランティアは「自分で考え行動する」が基本ですが、「人の意見を聞く」事も重要な要素であると改めて実感しました。

プレゼンテーションルームでは、実際に中越沖・能登半島地震の被害に遭いながらも、地域の復旧と復興に尽力されている方々のお話を聞かせていただきました。この両地域では高齢化が進んで（人口の40%以上が高齢者）いたのに加え、被災により住民数が激減してしまった現実があり、「このまま生まれ育った町を消滅させてなるものか」と、復興の為に次々と住民が立ち上がったそうです。被災というピンチを復興というチャンスに替えた方々に感動しました。自分に来る事から少しずつ始めることが大切なのです。今回参加して、いろいろな事を知り、考え、感じる事ができ、とても有意義な1日でした。」（事務局）

安全奉仕団は、団員の皆さんが「安心して活動できる環境」を保証するために、本社・支部、県内赤十字施設の関係各課と、今後も継続して調整を進めていきます。